

## 八尾市植田家調査報告

### <調査の経緯>

センターでは、平成17年度より、大阪府八尾市・旧植田家住宅所蔵資料の調査・研究を開始した。植田家は、近世期、安中新田の会所として地域において重要な役割を果たしていた家である。同家には、家屋・土蔵・庭など屋敷としての空間構造のほか、そこに所蔵されている書籍・古文書・書画・民具などの貴重な資料が残されており、包括的な調査・研究が可能である。

平成18年度より、調査・研究を円滑にすすめるため、一時センターの収蔵庫にて資料を保管することになった。この資料群は、平成20年度に「(仮称)旧植田家史料館」完成後、返却することになっている。民具および家屋のスキャニングについては、年に数回現地に出向き、調査を行った。

### <各調査の概要>

#### ①書籍調査

松本 望

植田家の書籍は主に主屋と土蔵に収蔵されていた。平成17年8月8日におこなった予備調査の時点では、主屋の分は既に段ボール箱に整理されていた。一方土蔵の書籍は木箱に収められたままで、植田家の人が利用していた当時の環境を保持していたように思われた。そこで平成17年度は土蔵の書籍の所蔵状態の現状把握作業を主におこなった。具体的な作業としては、土蔵全体と書棚の見取り図の作成と写真撮影、書籍の搬出・曝書後、外題と冊数のみを摘記し、仮目録を作成した。

平成18年度は5月～6月におこなったセンターへの移管、くん蒸作業の後、7月から書誌詳細調査を開始し、現在も継続中である。調査項目として、1. 整理番号、2. 書名(外題・内題)、3. 著者・編者、4. 数量(巻数・冊数)、5. 丁数・頁

数、6. 装丁、7. 綴じ方、8. 書型・寸法、9. 匡郭・字高、10. 罫紙の有無、11. 文体、12. 刊記、13. 書肆、14. 序文・跋文、15. 蔵書印、16. 書込み、17. 『国書総目録』の記述を立て、調査用紙と表作成ソフトによる記録をおこなっている。なお平成19年5月から継続的な八尾市調査補助員として辻本麻衣を増員した。

特徴については、藪田貫が明らかにしたが、『商売往来』『百姓往来』『庭訓往来』などの往来物が多い。特に植田家4代市太郎の署名が入った『庭訓往来』の写本は、本文の肩に日付が書かれていたり、本文の書写が途中で止まっていることから、幼少期の市太郎の学習過程がわかる貴重な資料である。また『逸史』や『懐徳堂旧記』、『懐徳堂遺書』と称したシリーズ物といった懐徳堂関係の書籍、泊園書院2代院主の藤沢南岳が編集した『七輯』などを持っており、明治期大阪の漢学塾と深くかかわっている可能性が高い。そしてこのことを表象するかのよう、植田家には漢籍が数多く所蔵されている(「植田家の人々と学芸」(『Occasional Paper No.5 八尾安中新田植田家の文化遺産』所収))。

四書五経に属する書籍とともに漢詩関係の書籍が所蔵されている。やはり中国の詩人による漢詩集が多いが、菅茶山など邦人による漢詩集も見られる。漢詩の制作にも興味があったのか、漢詩制作のための概説書(『幼学詩韻』など)が散見できる。

また人相・家相に執心していたようで、人相については、近世期大坂の易相学の大家であった水野南北の著書(『南北相法』天明8年刊)や、明治・大正期に出版された書籍や雑誌が見られる。家相についても、明治・大正期に刊行された書籍や雑誌が多数見られ、そのころにおこなわれたであろう植田家屋敷の改修の際に役立てられたかもしれない。

平成20年2月現在、土蔵の書籍については整理を終え、主屋にあった書籍の調査を進めている。主屋の書籍は手書きのものが多く、植田家にある書籍を記録した『目録』(S. UEDA(植田茂治カ)著、

大正5年1月)をはじめ、植田家の人びとの手になるものも散見される。内容を精査しながら、調査を進めていきたい。

## ②所蔵民具からみた植田家

森 隆男

今回の調査では、長屋門に付設された土蔵1に保管されていた家財道具と、主屋の土間に残されていた台所用具など比較的新しい資料が対象になった。また別棟の土蔵2で厳重に保管されてきた資料については、ボランティアのメンバーによって調査が行なわれている。本稿では、これらの調査によって得られた成果の一端を紹介したい。

土蔵1には長持や行李、膳、椀、火鉢、煙草盆などの家財に加えて、贈答用の生魚を収納する魚籠、箱膳、七輪などの生活用具が収納されている。元文3年(1738)の墨書をもつ膳や椀を納めた木箱は、植田家がこの頃には多人数の客を迎えることが求められる家格であったことを示している。その後も天明年間や寛政年間に什器類の購入が行なわれている。天保10年(1839)の銘が記された銭箱も収納されていた。土蔵2には大型の銭箱や天秤が収納されており、当家は両替商も営んでいたのであろうか。また、第二次世界大戦中に灯火管制のために作られた電灯の笠11点とカバー4点が収蔵されていたが、ほとんど使用された痕跡が認められなかった。2階の天井付近に各地の寺社で発行された古い神札が俵に詰められた状態で収蔵されていたのは、火事よけの呪術であろう。この家の主屋や付属建築物には民俗宗教の痕跡が多く残されている。

土蔵2には提げ重や大小の皿、椀、菓子器など比較的高い価額の家財道具が収蔵されている。茶碗や棗、茶杓などの茶器も多い。これらに加えて、ぜんまい式蠅取り器ハイトリック、アイスクリーマー、パン焼き器、ラジオなどが一緒に収蔵されている点に留意したい。当家では大正から昭和初期にかけて登場したこれらの商品を積極的に入手し、貴重な生活用具として認識してきたのだろう。

すべての資料について当家で使用されたことが確認できたわけではなく、また本来あるべき場所に収蔵されていたとはいえないが、これらの資料の種類や点数、購入年代などを詳細に分析し、書籍や軸物

などの収蔵情報と重ねる時、近世中期から近代にかけて植田家で展開された暮らしと、当家をとりまく世相の一端をさぐる上で貴重な情報を提供してくれるはずである。今後の活用が期待される。

## ③植田家所蔵の書画調査概要

長谷 洋一

八尾市植田家に所蔵される書画は、軸装、屏風、扁額を中心に江戸時代以降の作品が大半を占めており、その種類も仏画から世俗画まで多岐にわたっている。なかでも最も多いのが軸装品であり、ここでは植田家に所蔵される軸装品について概要を述べたい。

軸装品は専用の収納棚に纏まっており、棚には「春」「夏」「秋」「冬」「祝」「仏事」の張り紙がされ、墨蹟と絵画とを区別されずに整理されている。このことは植田家の書画が単なる収集目的ではなく、植田家で四季折々に、あるいは慶弔といった催事と共に床の間に掛けられ鑑賞に供された実用品としての性格を示している。

その点を示すように、筆者別にみても狩野派や土佐派をはじめとする有名な書画家だけでなく、今日では無名となってしまった書画家の作品も幅広く収集されており、特定の流派や書画家に限定していない。むしろ作品選定にあって重視されたのは、懸架される「時」に応じて「場」の雰囲気を引き立てる画題、画風であったと考えられる。

しかしながら作品を細かく見ていけば、愛石筆《松竹梅図》三幅対、鼎春嶽筆《山水図》、岡熊岳《寿老人図》、篠崎小竹・田能村竹田の寄合画帖など大坂で活躍した画家による作品が目をひく。これまで大坂画壇の研究は木村兼葭堂を軸にして展開しており、いわゆる大坂三郷内での交流で語られることが多いが、むしろ受容層としての大坂周辺地域の富裕層、特に庄屋職を務めたクラスでの受容も重要視されるべきで、植田家所蔵の近世絵画は大坂画壇の受容層を考察する上で貴重な事例とみることができる。大画面形式である襖絵については、吹田市・旧西尾家(上田耕甫・富士山図)、あるいは泉佐野市・旧新川家住宅(日根対山・山水図)などが認められるが、移動可能な軸装についてはこれまで良好な資料群がなく、そうした点で植田家所蔵の近世絵

画は大坂周辺部の富裕層における大坂画壇の受容状況を示す好個の資料群として捉えることができると考えられる。以上の関係は植田家において明治以降も継続していたようで、近代書画をみても矢野橋村、菅楯彦など大阪を基盤として活躍した画家の作品が多く含まれる。特に安政元年（1854）に京都で生まれ、鈴木松年や守住貫魚に学び大阪に在住して活躍した中島樗僊の作品を多数確認できたことは、喜ばしい。また京都美術工芸学校出身で竹内栖鳳に学んだ有井祥雲による近代日本画の伝統をひく作品も多く確認できる。

屏風、扁額も書画家よりも内容を重視したものが多く、軸装品と同じく「時」と「場」にふさわしい作品が収集されている。

このように植田家所蔵の書画は、その質・量からも当主の深い文化的素養を十分に伺い知ることができるものといえ、また江戸時代から近代にいたる植田家と京阪の画家との関係を示す資料としてみることができよう。

#### ④古文書調査

村山 弘太郎

関西大学なにわ大阪文化遺産学センターにおける八尾市・植田家文書の整理作業は、平成18年5月30日の植田家旧蔵資料のセンターへの搬入、6月7日～12日の資料燻蒸の後、八尾市臨時嘱託職員・村山弘太郎が開始した。

作業開始当初は、古文書群の全体像および現状の把握のため概要調査を中心に行った。その結果、経年の劣化による破損や汚れが激しいことが判明したため、藪田貫氏・浜野潔氏の助言を受け、古文書の目録化作業と平行して、清掃・分類作業を行うことを決定し、平成18年7月31日～8月4日、10月17日～20日の二期にわたり、関西大学の学部生・大学院生を八尾市の調査補助員として雇い入れ、集中的な作業を行った。

その後、平成20年5月からは村山に加え、八尾市臨時嘱託職員として北林千鶴、継続的な八尾市調査補助員として山崎善弘・荒益克文の3名を増員し、4名体制で整理・目録化作業を行い、現在も継続中である。

村山が確認した関西大学なにわ・大阪文化遺産学

研究センターに搬入された植田家文書は段ボール箱65箱である。その後も数度にわたり、植田家住宅の解体修理に伴う新発見文書の搬入が別個行われた。

古文書の入れられた箱は運搬のための便宜上使用されたものであり、サイズが不揃いで古文書の総点数の把握が困難であるが、概算として25000～27000点程度だと考えられる。また、通常の運搬資材用のダンボールが使用されているため、古文書の劣化が進む恐れがあることから、中性紙の文書保存箱への入れ替えを随時行っている。

先にも指摘したように、植田家文書は全般として、虫損やはがれ、汚れといった経年による劣化が目立つ。そのため整理の方法も、当初は各古文書に整理番号を記入した付箋を挿入する形で行っていたが、作業の過程で古文書のさらなる破損が生じる恐れもあり、また付箋の抜け落ちなどにより、整理の終了した古文書の特定が困難になる可能性もあることから、現在では付箋を挿入する方法と併用して、薄様で包み込むことによる整理を行っている。

目録作成においては、目録カードや調書といったものへの手書きによる記入は行わず、パソコンを使用して表作成ソフトでの入力を行っている。カード・調書類を作成した場合に必要な入力に要する別個の人員と時間を削減するためと、データ上での古文書の内容検索を将来的に目指すためである。

植田家文書に含まれる古文書群は近世中期から近代にかけてのものであり、内容的には、近世のものは植田家が「支配人」を務めた安中新田の運営など村政にかかわるもの、および質屋・酒造といった植田家の家政にかかわるものを中心である。近世に比べ分量の多い近代のものは内容も多岐に渡る。いくつかを挙げると、河内鉄道敷設関連、小学学区取締関連などの公職的なもの、また発起人を務めた河内カタン糸株式会社関連のなどは残存状態も良く、近代の大阪・河内地方における公共事業や会社経営に関する今後の研究に資するものである。

平成20年2月現在、整理・目録化が終了した文書はおおよそ6000点で、全体の20%程である。今後は平成21年5月の「(仮称)旧植田家史料館」開館に向け、植田家文書全体の整理・目録化と並行して、展示・解説に使用しうる古文書の選別的整理が必要になる。そのため、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課・岸本邦雄氏および作業従事者である村山・北



⑥八尾市植田家所蔵陶磁器調査概要

米田 文孝

旧植田家住宅は江戸時代から大正時代に建造され、建造物として文化財的観点から往時のことを読み取ることができる。また、旧植田家は建造物だけでなく、それらに属する多くの書物や記録類、陶磁器のように旧植田家の人々の生活に関連するような文化財も多く所蔵していることもその特徴の一つである。

旧植田家の文化財調査の陶磁器調査班は、土蔵に保管されていた多数の染付や天目茶碗などの基礎資料の作成を目的として、現況および補修状況などを写真撮影にて記録した。それらは、文化財的観点から旧植田家の人々の生活環境の一端を如実に示す貴重な資料である。以下に旧植田家所蔵の陶磁器の一例をあげる。

①鉢 松文

|                   |                          |        |   |             |                |   |
|-------------------|--------------------------|--------|---|-------------|----------------|---|
| 荷札<br>番号          | 0612-034-4               |        |   |             |                |   |
| 2                 | 階                        | 1      | 棚 | C           | 段              | 3 |
| 鉢                 | 綿手<br>松文(大)<br>高台内蛇の目釉剥ぎ |        |   |             |                |   |
| 作者                |                          |        |   |             |                |   |
| 形状<br>(W×H<br>×D) | 径 260×105(4)             |        |   |             |                |   |
| 外箱(W<br>×H×<br>D) | 283×200×283              |        |   |             |                |   |
| 件<br>数            | 1                        | 数<br>量 | 3 | 記<br>録<br>日 | 2006年<br>11月1日 |   |
| 備<br>考            |                          |        |   |             |                |   |

